

春風吹かせ！' 18センバツ／4 慶應

毎日新聞 2018年1月31日 神奈川

集中力で守り切る 実戦練習積み、成果実感



守備練習に励む大川裕也選手＝横浜市港北区の日吉台球場で28日

傾き始めた太陽が照らす昨年7月25日の横浜スタジアム。慶應の大川裕也選手（2年）は準々決勝の桐光学園戦で、最終回の攻撃をベンチから祈るような思いで見守っていた。左翼手として途中出場した大川選手は八回裏の守備に後悔があった。逆転され3点のリードを許した直後、打者がフライを上げた。「気持ちを切り替えきれていなかった」。落下点に向かう1歩目をうまく出せずに二塁打にし

てしまった。更なる失点にはつながらなかったものの九回には先頭打席に立ち二ゴロで凡退。「アウトを取れていれば攻撃のリズムが違ったかもしれない。投打ともに貢献できなかった」

試合は初回到5点を先行されながらも追いついては勝ち越され、落ち着いた展開だった。八回表にようやくリードしたが、直後に逆転を許した。九回、2死満塁まで意地を見せるも8-11と及ばず、無念の8強。泣き崩れる先輩の姿に大川選手も涙がこみ上げた。昨シーズンのチームは秋の関東大会4強をかけた試合でサヨナラ負けを喫すなど、勝てそうな試合を落としてしまっていた。あと一歩のところまで逃してきた勝利に、大川選手は「二度と繰り返したくない」と誓った。そして、終盤でも集中力を保って守り切るための練習が始まった。

一方、森林貴彦監督(44)は別の面からも守りの重要さを感じていた。「本塁打を打てる選手が抜けて打力が落ちる。少ない点数で勝てるチームにする必要があった」と、新チームの練習では守備に多くの時間を割いた。選手の気持ちと監督の意図は一致し、昨秋は打撃で苦労したものの、もぎ取った得点を守って競り勝つ試合が目立った。試合を見た上田誠・前監督(60)は「うまく場面設定をした実戦練習を相当積んでいると思う。試合でピンチを迎えても慌てる様子が無い」と選手が取り組んできた練習の成果を実感していた。新チームで大川選手は外野手チーフに選ばれた。昨夏のチームで務めていたのは入部初日から面倒を見てくれた森莞汰選手（3年）。「絶対に甲子園に行ってほしい」。先輩から託された夢をかなえ、「秋は最後まで集中力を切らさずに守り切れた。雪辱は果たせたと思う」と安堵（あんど）の表情を見せた。「苦しい思いをしてきた8学年分の先輩の思いが積もり積もってこれまでより少しだけ良い結果になった」。選出の知らせを受けた今月26日、森林監督はそう話した。「失敗を恐れずに日本一を目指したい」と大川選手。先輩の悔しさを強さに変えたチームは、次なる目標“センバツ初優勝”を目指す。【中村紬葵】＝つづく

コーチと二人三脚 自分なりの「4番」模索し



関東大会後、打撃の練習に励む下山悠介主将



選手に打撃指導をする学生コーチの宮良里紀さん（左）＝横浜市港北区の日吉台球場で

昨年9月下旬、全体練習後に照明が落ちた慶応のグラウンド。片隅でネットに向かってバットを振る下山悠介主将（2年）の姿があった。数球を打つごとにコーチと話し合い、

また打ち込む。じっくりくるスイングの感触を地道に探していた。

下山主将はもがいていた。けがから復帰してすぐに迎えた昨夏は中距離打者として、3番で大会に出場。高校通算50本塁打を放った絶対的な4番・正木智也選手（3年）が引退した今チームには「主砲」と呼べる存在がいなくなった。4番を引き継いだ下山主将だが、高校の1年半で本塁打は数えるほど。「頭では分かっているけど自分が打たないといけないと思ってしまう」

新チームから本格的に打撃コーチを担当した宮良里紀さん（22）は飛距離を伸ばすことを提案した。下山主将のセンスと柔軟性のあるフォームに「もっと大きい当たりを打てるはずだ」と可能性を感じていたからだ。下山主将は「お願いします」と答え、二人三脚での挑戦が始まった。それからは毎日欠かさず全体練習後にコミュニケーションを取り、その日の感覚を確認。「たくさん学んだ知識から試したいと思わせてくれる方法をわかりやすく教えてくれる」とコーチへの信頼は厚い。ただ言われるままにするのではなく、試して納得できたものを取り入れてきたという下山主将を、宮良さんも「本人の感覚が一番大事」と見守っている。試行錯誤は続いているが、予選を含めた秋季県大会8試合で4本塁打と少しずつ成果が出てきた。

宮良さんを含めて13人のコーチは慶応大学の学生だ。弁護士を目指す杉山瑛彦さん（22）は「インターネットで見られる指導法の動画はほぼ全て見た」というほど勉強熱心で、指導内容を記録したノートは1年で20冊に迫る。熱意あふれるコーチ陣に、関東大会準決勝で好投した渡部淳一投手（2年）も「自分では気づけないことを的確に教えてくれる」と信頼を寄せる。コーチの存在は心の支えでもある。県大会決勝で東海大相模に0-12と大差で敗れた日の深夜、学生コーチを最も長く務める玉村拓也さん（22）に、下山主将からLINE（ライン）でメッセージが来た。「気持ち切り替えられないです」。大敗にショックを受ける下山主将を玉村さんは「今のチームがだめなわけではない。劇的に成長できる伸びしろはある」と励ました。兄のよ

うな学生コーチの激励を受け、関東大会で4強入りを果たしセンバツ出場を決めた選手たち。チャンスに強い打者を目指し、下山主将は自分なりの「4番」を学生コーチと共に模索し続ける。
【中村紬葵】=つづく

春風吹かせ！ ‘18センバツ／6止 慶応 毎日新聞 2018年2月2日 神奈川

楽しんでこそ野球 選手同士で考え率先



県大会準決勝の鎌倉学園戦で九回裏に同点の走者を背負い、マウンドに集まる慶応の選手たち＝横浜市保土ケ谷区のサーティーフォー保土ケ谷球場で

昨年9月23日の県大会準決勝。対戦相手は、夏の甲子園に出場した横浜にコールドで勝ち勢いに乗る古豪・鎌倉学園。秋季大会では30年ぶりとなる決勝進出を期待する観客が鎌倉学園のスタンドを最上段まで埋め、えんじ色のメガホンを持って大声援を送っていた。

九回裏、守る慶応のリードはわずか1点。セーフティーバントで出塁を許した走者が犠打と凡打で三塁まで進み、迎えるのは4番打者。ひととき大きくなる歓声とは対照的に、ここまで129球を投げた慶応のエース・生井惇己投手（2年）は落ち着いていた。「見ている人にとってはすごく面白い場面。こんな状況で投げられる機会はめったにない」。持ち前の負けん気を発揮し、秋から良くなってきたという縦のスライダーで空振り三振に打ち取ると、左手を握って雄たけびをあげた。

「相手の声援が襲いかかってくるかと思った」と生井投手は振り返る。「でも、厳しい場面だからこそ切り替えられたと思う。純粹に勝負を楽しめた」。自身最多の14三振を奪い、1-0と気の抜けない試合を投げ抜いたエースは憧れてきた「エンジョイベースボール」をマウンドで体現していた。上田誠・前監督(60)が大学野球から高校のチームに持ち込んだエンジョイベースボールという合言葉。丸刈りの髪形をやめるなど、スポーツ本来の明るさを取り戻そうと、高校野球に新しい風を吹き込んだ。

「やらされるのではなく、自らやる」というのもその一環だ。3年前に上田前監督から引き継いだ森林貴彦監督(44)は、選手の自主性に感心させられた経験がある。試合でヒットエンドランのサインを出したが、打者はバットを振らず走者も走らなかった。監督としては叱りたくなるような場面だが、サインを見逃しやすいう打者の癖を走者が把握していて、この時も打者がサインを見ていないことに気づいたのだという。「すごいなと思った」と森林監督。「これが自分たちで考える慶応の野球。言われたことをそのままやるというのは、こちらも求めていない」

自ら考えて楽しむ慶応の野球は、下級生にも受け継がれている。善波力捕手（1年）は「教えてもらったことを選手がかみ砕いて発展させる環境がある」と話し、吉川海斗選手（1年）も「自分で何に気をつけるかを考え、練習しながら自分の技術力も上がる。野球が楽しい」と語る。森林監督は「甲子園では、観戦した子どもたちが野球を始めてくれるような試合をしたい」と、選手たちが躍動する姿を夢に描く。創部130年を迎える伝統校は、野球そのものの未来をも見据えながらセンバツの舞台を待つ。【中村紬葵】=おわり